

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18401017

研究課題名（和文） 旧満州農村のロシア人住民 - 日本人との接触とソ連邦への帰還 -

研究課題名（英文） Russian inhabitants in rural Manchuria. Contact with Japanese and their return to USSR.

研究代表者

阪本 秀昭（SAKAMOTO HIDEAKI）

天理大学・国際文化学部・教授

研究者番号：20068787

研究成果の概要：20世紀初頭にロシア極東地方から旧満州に亡命したロシア正教・古儀式派教徒の信仰と生活、彼らの日本人との接触・交流について調査するために、ロシア・ハバロフスク地方のペリョーゾヴィ、タヴリンカ村、旧満州の農村等を訪問し、情報を収集した。その結果、古儀式派教徒の移住経路、移住と亡命の理由、移住地における日本人や中国人との交流の様子、移住先での生活と信仰について、これまで不明であった点を明らかにすることができた。また第二次世界大戦後にソ連邦へ帰還した古儀式派教徒の今日の姿を、20世紀前半に日本人研究者によって記録された同教徒の旧満州での生活と比較することによって、彼らの信仰と生活における変化と伝統について知ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,100,000	0	2,100,000
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	5,900,000	1,140,000	7,040,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般：

キーワード：ロシア正教古儀式派、三河地方、コサック、ロシアへの帰還、日露住民の相互交流、中国への移住、旧満州、ハルビン、ロシア極東、ロマノフカ村、白系露人事務局

1. 研究開始当初の背景

旧満州・横道河子付近にあったロシア人古儀式派教徒の村、ロマノフカは、1930～1940年代には日本人によく知られた存在だった。しかし第二次世界大戦後のロマノフカ村の様子、およびソ連に帰還した古儀式派教徒の動向には、不明点が多かった。戦前のロマノフカ村の様子や、アメリカに移住した古儀式派教徒の現状については多くの文献が存在したので、代表者らはそれらを収集・分析し

つつ、同時にロシア極東のペリョーゾヴィ・タヴリンカ村、および中国東北地方（ハルビン、旧ロマノフカ村周辺農村） 内蒙古自治区呼倫貝爾市（旧三河地方）での実地調査を計画した。

2. 研究の目的

研究史上の空白を埋めることが第一の目的となった。すなわち戦後のロマノフカ村周

辺の古儀式派教徒の動向を明らかにすること。次にソ連に帰還した古儀式派教徒の足跡と現状を明らかにすること。その成果の上に立って、彼らの移住経路、移住の理由、古儀式派教徒の信仰と生活、教義内容、伝統の形成とその変容、日本人や中国人との接触や交流について全体像を把握することである。

3. 研究の方法

古儀式派教徒の移住経路と周辺住民との関係、および戦後の古儀式派教徒の動向を調査するために、ロシアのハバロフスク地方・ブリヤート共和国、中国東北地方（遼寧省・黒竜江省・内蒙古自治区）でフィールドワークを実施した。それぞれの調査地では、関係者への聞き取り調査や参与観察を行うとともに、図書館・文書館・村役場で資料収集を行った。また日本でも、戦前の日本語史料の収集と分析を進めるとともに、関係者へのインタビューを行った。

4. 研究成果

(1) 今回我々がフィールドワークで得た知見を、既存の研究や史料とつなぎ合わせることによって、東北アジアにおける古儀式派（礼拝堂派）教徒の動向を、より深く、多面的に把握できるようになった。

その結果、礼拝堂派の古儀式派教徒が経験した数世紀にわたる歴史、つまり帝政時代のウラル・シベリア地方における礼拝堂派の興隆と経済的繁栄、ソ連時代に彼らへ加えられた弾圧と旧満州（中国東北地方）への逃亡、第二次世界大戦後のソ連への帰還または第三国への再移住を、一つの大きな物語としてイメージし、個々の要素間のつながりを理解することが可能となった。

(2) これまでの調査では、ソ連邦から旧満州国に移住した古儀式派教徒たちが、どの程度国家（満州国・日本）の統治体制に組み込まれていたかが不明であった。しかし我々の文献調査や聞き取り調査の結果、古儀式派教徒らが日本の特務機関の支配下に置かれていた状況がはっきりとしてきた。

また、中国におけるいくつかの古儀式派教徒の村が特定できたのも大きな成果であった。これにより古儀式派教徒の戦前戦後を通じての相互連絡体制、村同士の関係、移住経路がより明確に把握できるようになった。

(3) 中国における現地調査の結果、第二次世界大戦後のロマノフカ村周辺の古儀式派教徒と中国人との間の交流の様子がかなり明らかとなった。また調査の過程で、第二次世界大戦前後のロマノフカ村の様子を知る方々が現在山口県に居住されていることが

判明し、聞き取り調査を行うことができた（調査継続中）。これによって、中国人、日本人の目から見た古儀式派教徒の生活や、複数の古儀式派村の相互関係、戦後のロシア人村の解体過程が明らかになりつつある。

ロシア人と日本人、中国人、朝鮮人との接触と交流については、調査の途についたばかりである。当事者の中に相互に残された深い記憶を掘り起こすことは、今後の重要な作業となるだろう。

(4) 第二次世界大戦後に中国からソ連へ帰還した古儀式派教徒たちは、シベリアやロシア極東に村や集落を築いた。今回、極東におけるそのような村々（タヴリンカ村、ペリョーゾヴィ村など）を訪問し、かつて中国に住んでいた人々から当時の話を聞くことができた。その結果、戦前期の日本人が収集・公開した情報には欠けていた事実（ソ連邦を脱出してからロマノフカ村にたどり着くまでの詳細な経路、古儀式派教徒の戦前戦後を通じての相互連絡体制、村同士の関係など）を、新たに補うことができた。

特に大きな成果は、礼拝堂派古儀式派教徒が満州時代に開いた宗教会議の決議書入手したことである。戦前の日本人研究者は、古儀式派教徒の宗教生活にあまり大きな注意を払わなかったのだが、入手した宗教会議史料を同派の別の宗教会議記録と比較することによって、同派の信仰や教理に関する理解を深めることができ、また彼らが中国でおかれていた特殊な事情を理解することができた。加えて、実際に古儀式派教徒の方々と交流することで、その心情や思想にじかにふれることができたのも大きな収穫であった。

(5) ロシア極東の古儀式派集落では、中国帰還者たちの現在の住居、食事、服装、学校教育への態度、結婚範囲、教導者の役割、家族構成、村落形成、経済活動等についても調査した。また村の行政では、古儀式派教徒の家族構成に関する資料を入手することができた。これらのデータを分析することで、礼拝堂派信徒の現在の家族関係、家族形成の原理が解明されつつある。つまり、彼らは現在では核家族化する傾向が顕著であるが、親と同居する家族も少なくなく、さらに核家族化してもその住居は親の住居を取り囲むか、少なくともそのすぐ近くに配置されることが多いことが明らかとなった。すなわち拡大された共同体的直系家族形態がこのような形で維持されていることが判明した。古儀式派教徒の村落や社会形成の原理も、この家族形成原理と深い関係を持っているであろうことは疑いがない。今後はこの方向での研究を推進する必要があるであろう。

(6) ロシアに帰還した古儀式派教徒の生活を、オーストラリアやアメリカ、カナダに移住した同宗者の生活や信仰と比較検討することで、ロシア帰還者の特徴が一層明瞭に把握できるようになった。彼らは農業以外の分野にも進出し、グループを組んで営業活動にあたる者も見受けられる。このことは、今後彼らの中から優れた営業活動者が現れる可能性があることを示唆している。教育問題や政治権力との関係、伝統の伝達においても安定した姿勢を保っており、現在この問題に関しては彼らの間に大きな緊張感は見られない。これは北米やオーストラリアの同宗者には見られない傾向である。ただし、伝統文化になじめない若者の出現という新しい動向もあり、内部には複雑な事情があることを覗かせていることが判明した。

(7) 本研究では旧満州国ロシア系住民内部での礼拝堂派古儀式派教徒の位置づけを知るために、ハルビンの都市住民や別派(ベロクリニーツァ派)の古儀式派教徒、古儀式派教徒以外の農村住民(三河地方およびそのほかの村の住民)にも注目した。なかでも、ハルビンや三河地方に居住していたベロクリニーツァ派教徒については、その存在が日本語文献で指摘されているにもかかわらず史料自体は少なく、ロシア人の宗教に対する当時の日本人の関心の低さを裏付ける結果となっていた。今回、ブリヤート共和国公文書館で文献調査を行い、さらに同派司祭の刊行された自伝を入手できたことにより、ハルビンおよび移住先のオーストラリアでの同派の状況がある程度判明した。つまり、ハルビンという異郷の地において、同派とロシア正教主流派とはかつてない友好的関係を保っていたが、ベロクリニーツァ派教徒とロマノフカ村の礼拝堂派教徒とはとくに緊密な関係を持っていなかったこと、また前者内部では本国での地域関係や派閥を反映した対立関係が深刻な問題となっていたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16件)

阪本秀昭「旧満州シリンヘ村における正教古儀式派宗教会議について」『天理大学学報』第220輯、pp.1-17、2008年)査読あり。

阪本秀昭「ハバロフスク地方タヴリンカ村の古儀式派住民の生活と信仰」『セーヴェル』第25号、pp.78-90、2009年、査読

なし。

阪本秀昭「横道河子、ロマノフカ村再訪記」『セーヴェル』第25号、pp.174-182、2009年、査読なし。

Сакамото Х. Исследование в Японии жизни и истории старообрядцев.

«Старообрядчество Сибири и Дальнего Востока. Местные традиции. Русские и зарубежные связи». Материалы четвертой Международной конференции 14 – 17 сентября 2004 года. Владивосток. с. 82-85, 2007. 査読なし。

Сакамото Х. Старообрядческая деревня Усть-Ширфовая в Трехречье. «Старообрядчество: история и современность, местные традиции, русские и зарубежные связи». Материалы пятой международной

научно-практической конференции 31 мая – 1 июня 2007 г. Уран-Удэ. с. 107-113, 2007. 査読なし。

阪本秀昭「旧『満州』三河地方シルホーヴァヤ村の古儀式派住民とその移住経路について」『セーヴェル』第24号、pp.51-57. 2006年、査読なし。

阪本秀昭「クラスノヤルスク地方ドゥブチエス古儀式派礼拝堂派修道院について」『セーヴェル』第24号、pp.41-50. 2006年、査読なし。

阪本秀昭「旧『満州』から帰還したロシア正教古儀式派礼拝堂派教徒 — マルチュシェフ家の人々 —」『セーヴェル』第23号、pp.15-25. 2006年、査読なし。

伊賀上菜穂「ハルビン古儀式派教会の内部関係 - ソ連・旧「満洲」往復書簡にみる本国と亡命者社会の連関 -」生田美智子編『ディアスポラ社会の構造と対権力関係 - 旧満洲白系露人事務局関連文書の調査を中心に -』平成20年度言語社会専攻研究プロジェクト研究成果報告書、大阪大学大学院言語文化研究科、pp.77-96、2009年、査読なし。

伊賀上菜穂「日本人とロマノフカ村 - 日本側資料に現れる旧満洲ロシア人古儀式派教徒の表象 -」『セーヴェル』第25号、pp.55-77、2009年、査読あり。

伊賀上菜穂「『旧』古儀式派農村はソ連時代にどう語られたか - ザバイカル地方・セメイスキーに関する1960~1970年代の記述の特徴 -」北海道大学スラブ研究センター、『共産圏の日常生活』(スラブ・ユーラシア研究報告集1) pp.111-129、2008年、査読なし。

伊賀上菜穂「極東の古儀式派教徒 - 信仰を守る熱意とその困難 -」『季刊民族学』124号(第32巻、第2号)(特集「ロシア北方の民」)、国立民族学博物館、pp.

41-44、2008年、査読なし。

伊賀上菜穂「ブリヤート共和国の古儀式派会議 - ザバイカル地方訪問記 - 」『セーヴェル』第24号、pp. 31-40、2007年、査読なし。

Игауэ Н. К некоторым проблемам современной жизни старообрядцев-часовенников в Хабаровском крае, вернувшихся из Китая в СССР в 1950-х гг. // Диаспоры в современном мире. Материалы международного круглого стола (г. Улан-Удэ, 15 октября, 2007 г.). Улан-Удэ, 2007. Ст. 261-266. (伊賀上菜穂「1950年代に中国からソ連に帰還した古儀式派教徒の現状について - ハバロフスク地方礼拝堂派教徒の事例 - 」『現代世界におけるディアスポラ』(国際円卓会議報告集、ウラン・ウデ、2007年10月15日)ウラン・ウデ、pp.194-211、2007年) 査読なし。

Игауэ Н. Представления о маньчжурских старообрядцах в японских письменных и визуальных материалах (середина XX – начало XXI вв.) // Старообрядчество: история и современность, местные традиции, русские и зарубежные связи (Материалы V Международной научно-практической конференции 31 мая – 1 июня 2007 г., г. Улан-Удэ). Улан-Удэ, 2007. Ст. 134-139. (伊賀上菜穂「日本の文献、映像資料に現れた旧満洲在住古儀式派教徒の表象 - 20世紀中旬から現代まで - 」『古儀式派 - 歴史と現在、地域の伝統、国内および国際関係 - 』第5回学術・実用国際会議報告集(2007年5月31~6月1日、ウラン・ウデ)。ウラン・ウデ、pp. 134-139、2007年) 査読なし。

生田美智子、塚田力、阪本秀昭、伊賀上菜穂「旧満洲に残る「ロシア」をたずねて」『セーヴェル』第23号、pp. 46-76、2006年、査読なし。

〔学会発表〕(計 2件)

阪本秀昭「旧満洲シリムヘ村における正教古儀式派宗教会議について」ロシア・東欧学会、JSSEES、ロシア史研究会、ロシア文学会 2008年度共同大会、(2008年10月12日 / 於名古屋学院大学)

伊賀上菜穂「ポスト社会主義時代のロシア正教古儀式派 - シベリア・極東における容僧派と無僧派の現在」北海道大学・21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」総括シンポジウム「スラブ・ユーラシア学の幕開け」(2008年1月24日 / 於学士会館)

〔図書〕(計 1件)

阪本秀昭、伊賀上菜穂『旧「満洲」ロシア人村の人々 - ロマノフカ村の古儀式派教徒 - 』ユーラシアブックレット、No. 103、東洋書店、2007年2月20日。

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 秀昭 (SAKAMOTO HIDEAKI)
天理大学・国際文化学部・教授
研究者番号：20068787

(2) 研究分担者

伊賀上 菜穂 (IGAUE NAHO)
中央大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：10346140

(3) 研究協力者

アルグジャーエヴァ・ユーリア・ヴィクトロ
ヴナ(Аргудяева Юлия Виктровна)
ロシア科学アカデミー極東支部・極東諸民族
歴史・考古学・民族学研究所・上級研究員

生田 美智子 (IKUTA MITIKO)
大阪大学・外国語学部・教授
研究者番号：10346140

塚田 力 (TSUKADA TSUTOMU)
北海道大学・大学院文学研究科・博士後期課程